

報 文

親との関係及びこれまでの生活経験が 大学生の未来の家庭展望に及ぼす影響

— 家族観, 生活観を媒介して —

渡辺 朗生^{1*}, 今川 真治¹

How Do University Students' Relationships with Their Parents and Past Daily Life Experiences Affect Their Future Family Prospects?

Tokinari WATANABE^{1*} and Shinji IMAKAWA¹

This study aimed to reveal the formation state of university students' future family prospects and to determine how the impact of their relationships with their parents and past daily life experiences affect these prospects. The following results were obtained: (1) University students have relatively clear expectations and hopes for their future family formation, but are not very concerned with their future family lives. (2) Students with good parental relationships and who have had abundant life experiences are likelier to form a view of their future family. Further, forming views of one's future family and lifestyle facilitates the construction of their future family prospects. (3) Family views were categorized into four types: non-interference, collaboration-oriented, independence-oriented, and omnidirectional-oriented. Lifestyle views were categorized into five types: self-growth-oriented, social relationships-oriented, self-oriented, theory-oriented, and indifferent. (4) University students' perceptions of their future family prospects differed depending on the types of family and lifestyle views they hold.

Key words : future family prospects 未来の家庭展望, relationships with parents 親との関係, past daily life experiences これまでの生活経験, family views 家族観, lifestyle views 生活観, university students 大学生

1. 研究の背景と目的

Erikson (1959) は, 青年期の発達課題である「自我同一性の獲得」の構成要素の1つとして, 時間的展望の獲得を挙げている。時間的展望は, 「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」と定義されており (Lewin 1951), 動機づけ機能, 人格的機能, 共同化機能の3つの機能が示されている (白井 1997)。児童期から青年期に移行するにつれて, 子どもの時間的展望が拡大するとともに, 現実と空想の分化が促されることによって, 青年は自分が置かれた現在の状況をよりリアルに, より客観的に捉えることができるようになる。また, 石井 (2015) によれば, 自分の過去・現在・未来を連続的なものとして捉えることは, 青

年期における時間的展望の重要な1側面であることが指摘されている。我々は人生において困難や課題に直面したとき, 過去の経験に鑑みながら, 現在の状況や行動, 観念を未来の事象と関連づけ, 自分にとってよりよい選択をしていく。このことから, 時間的展望の形成は, 我々が現在を, そしてこれからの人生をよりよく生きていくうえで非常に重要である。特に, 大学生の時期は, 生活における活動範囲が拡大することや精神的・経済的・生活的自立度が高くなることから, 自身の時間的展望をより明確に, 現実的なものとして捉えることができると考えられる。このことから, 大学生の時間的展望の実態やその影響要因を明らかにする意義は大きい。

ところで大学生の時期は, 出生から成長を過ごしてきた定位家族からの自立と, 自分の意志による創設家族の

所属機関名: ¹広島大学大学院

¹Graduate School of Hiroshima University

原稿受付: 2021年4月7日 原稿受理: 2021年9月4日

* To whom correspondence should be addressed E-mail: d213722@hiroshima-u.ac.jp

形成との過渡的な位置にあり(五十嵐 1989)、家族形成や家庭形成に向けた準備も青年期後期の主要な発達課題であるといえる。現在、多くの青年は、将来結婚することや子育てをすることを望んでおり(国立社会保障・人口問題研究所 2017)、未来の家族形成や家庭形成について前向きに捉えている。一方、大学生の未来への見通しの実態を調査した京都大学・電通育英会(2016)によると、結婚や家庭生活などを含めた未来への見通しを実現させるために、「何をすべきかはまだ分からない」と回答した大学生が51.7%にのぼる。この背景として、例えば、家族形態や性役割観の多様化などによって、青年の未来の家族形成や家庭形成についての見通しが不透明になっていることが考えられる。このような漠然とした見通しをよりリアルに捉えるためには、青年期後期において家族や家庭生活に関する時間的展望、つまり家庭展望を獲得、形成し、未来の家庭生活への見通しを広げたり、客観的に捉えたりすることができるように発達させていくことが必要となるだろう。本研究では、「個人の過去・現在・未来を相互に関連させることで創発される、家族形成や家庭形成に対する認知、欲求及び感情」を家庭展望と定義する。また、青年が未来の家庭生活への見通しを広げたり、客観的に捉えたりすることができるようになることを、「未来の家庭展望の形成」と表現することとした。

村田(2009)は、個人内の過去・現在・未来について、他者との関係性の中で考えていくことの必要性を指摘している。とりわけ、養育者による適切な関わりは、子が独自の時間感覚を獲得することに大きな影響を及ぼすことが示されている(Winnicott 1965)。例えば、堂野(2015)は、女子大学生とその母親及び父親との心理的距離が近いほど、将来適応感が高いことを示した。女子大学生の「なりたい親」像を調査した櫻井・本多(2004)は、大学生の「なりたい親」は自分の親を基準とした親であり、特に思春期における親との関係が、大学生の理想の親像に影響を及ぼすことを示唆している。また、恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと大学生の結婚観との関連を調査した今川(2017)によれば、男子学生の結婚観は父母それぞれとのコミュニケーションから、女子学生の結婚観は父母とのコミュニケーションと両親の関係性から影響を受けることが示されている。女子短大生の結婚・出産に対する意識を調査した権田(2019)は、親からの愛情を強く認識している学生が、結婚や出産を主体的に考えていることを明らかにした。以上のように、大学生と父母との関係性は、大学生の未来の家庭展望の形成に影響を与えられられる。

一方、都筑(2013)は、児童期における活動経験と青年期中・後期における時間的展望との間に関連性がある

ことを明らかにしている。さらに、Greene(1986)は、青年期の未来に対する時間的展望には、これまでの経験の蓄積のみならず、その経験と文脈との一致や、経験と自己関与との一致が影響を与えることを示唆している。青年の、家庭生活や社会生活における活動経験に焦点を当てた研究をみると、例えば、高校生を対象とした調査ではあるが、基本的な生活習慣及び生活技術と将来の生活設計との相関を示した湯尾・湯尾(2008)は、基本的な生活習慣の確立と生活技術の習得によって、青年の「なりたい自分」像が形成されることを述べている。また、佐藤他(2004)は、大学生の時間的展望における生活行動として、「現在未来充実型行動」、「目標達成行動」、「他を配慮した意思決定」及び「生活充実行動」を挙げ、これらの行動に対する大学生の認識を調査した結果、大学生は時間的展望において他者を配慮した生活行動をしていることを明らかにした。それに加え、奥田他(2016)は、大学生の時間的展望を「地域という文脈」から捉え、検討していくことの意義を示している。さらに、吉城他(2018)は、児童期における地元地域との関わりが成人後の地元地域に対する肯定的な態度や意識に影響を及ぼすことを明らかにした。以上のように、青年期後期における未来の家庭展望の形成には、家庭や地域における活動経験、つまり生活経験の蓄積も影響を及ぼすと言える。

以上のように、親との関係やこれまでの生活経験と、大学生の未来の家庭展望の形成との関連を示す研究が蓄積されてきた一方で、未来の家庭展望の形成のプロセスやメカニズムに言及している研究はみられない。前述の通り、大学生が未来への見通しを持つためには、その見通しを過去の経験や、現在の生き方に対する観念や基準と関連づけることが重要であり、未来の家庭展望の形成についても同様の指摘ができる。つまり、親との関係は、家族とはどうあるべきかという観念や基準である家族観の形成を通して、また、これまでの生活経験は、豊かな生活とはどのようなものであるかという観念や基準である生活観の形成を通して、それぞれ大学生の未来の家庭展望の形成に影響を及ぼすと考えられる。さらに、大学生が持つ家族観及び生活観のタイプによって、未来の家庭展望の捉え方に違いがみられることが予想される。これらの仮説をもとに、青年期後期の家庭展望モデル(図1)を構築した。

以上をふまえ、本研究では、以下の3点を明らかにすることを目的とする。まず、大学生の未来の家庭展望の形成状況と、家族観及び生活観の形成状況を明らかにする。次に、親との関係及びこれまでの生活経験が、家族観及び生活観形成を媒介して、大学生の未来の家庭展望の形成に及ぼす影響を明らかにする。そして、大学生の家族観及び生活観タイプと未来の家庭展望の捉え方との

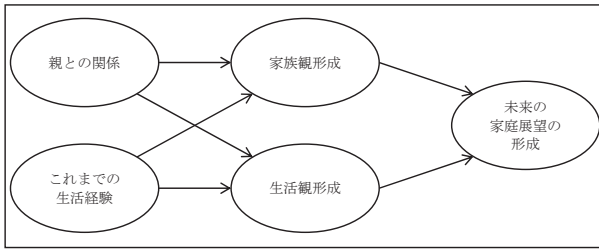


図1 青年の家庭展望モデル

関連を明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象と調査時期

中国地方の4年制X大学に在籍する1年生と3年生の男女を対象とし、令和元年11月に質問紙の配布と回収を行った。

(2) 手続き

授業内での一斉配布・回収により実施した。質問紙には回答したくない、または回答できない項目があれば回答を拒否する権利があることを明記するとともに、調査への協力を承諾するチェック項目を設けた。配布時に、アンケートの趣旨と、個人情報の保護を遵守することを口頭で伝え、同意したもののみについてアンケートを実施した。なお、論文公表に関する倫理的配慮に関しては、「日本家政学会誌投稿論文の倫理的観点に基づく審査」を受け、承認された。

(3) 調査項目

本研究における調査項目を表1に示す。

1) 親との関係

大学生と父母との関係を明らかにするために、小西・黒川(2000)、田中・上村(2017)を参考に質問項目を作成した。質問項目は、「両親とのコミュニケーション」と「両親との心理的距離」の2つの下位尺度から成り、それぞれ8つの質問を設けた。大学生が同性の親及び異性の親とどのようにコミュニケーションをとっているか、また、同性の親及び異性の親との心理的距離についてどのように感じているかを「そう思う」から「そう思わない」までの4つの選択肢の中から選んでもらう形式とした。分析の際には、「そう思う」が3点、「まあそう思う」が2点、「あまりそう思わない」が1点、「そう思わない」が0点となるように得点化した。

2) これまでの生活経験

大学生のこれまでの生活経験を明らかにするために、大石・松永(2008)、梶山・鈴木(2018)を参考に質問項目を作成した。質問項目は、「これまでの生活管理」と

「これまでの地域参加」の2つの下位尺度から成り、計10の質問を設けた。前者は6つの質問から成り、大学生のこれまでの衣食住や金銭管理に関する生活管理について、後者は4つの質問から成り、大学生のこれまでの地域参加について、「いつもしていた」から「ほとんどしなかった」まで4つの選択肢の中から選んでもらう形式とした。分析の際には、「親との関係」と同様に得点化した。

3) 家族観

大学生の家族観の実態を明らかにするために、杭瀬・三澤(2003)、リクルート住宅総研(2015)を参考に、計25の質問項目を作成した。これらの質問では、大学生がよりよい家族生活を実現するために何を重視すべきだと思うかを、「非常に重要」から「重要ではない」までの4つと「分からない」の計5つの選択肢から選んでもらう形式とした。なお、この質問項目では大学生の家族観の下位尺度として、「円満志向」、「情緒的結合志向」、「共同活動志向」、「規律志向」及び「自立志向」の5つの下位尺度を設けた。

4) 生活観

大学生の生活観の実態を明らかにするために、三川他(1993)、酒井他(1998)を参考に、計32の質問項目を作成した。これらの質問では、大学生が、生活を営む上で何を重視すべきだと思うかを、「非常に重要」から「重要ではない」までの4つと「分からない」の計5つの選択肢の中から選んでもらう形式とした。なお、この質問項目では大学生の生活観の下位尺度として、「健康志向」、「愛他志向」、「自己成長志向」、「経済安定志向」、「持続可能性志向」、「審美志向」、「理論志向」及び「文化継承志向」の8つの下位尺度を設けた。

5) 未来の家庭展望

大学生の家族形成や家庭形成に対する認知、欲求及び感情を明らかにするために、山内・伊藤(2008)、都筑(2009)、井梅(2019)を参考に質問項目を作成した。質問項目は、「結婚に対する期待感」、「子育てに対する期待感」、「未来の家庭生活への希望」及び「未来の家庭生活への志向性」の4つの下位尺度から成り、計16の質問を設けた。「結婚に対する期待感」及び「子育てに対する期待感」はそれぞれ4つの質問項目から成り、大学生の自身の結婚や子育てに対する期待感について、「そう思う」から「そう思わない」の4つと「分からない」の計5つの選択肢の中から選んでもらう形式とした。結婚願望及び子育て願望がない大学生に対しては、本質問項目に回答しないよう求めた。「未来の家庭生活への希望」及び「未来の家庭生活への志向性」はそれぞれ4つの質問項目から成る。「未来の家庭生活への希望」では、大学生が未来の家庭生活についてどの程度希望をもっているかを、また、「未来の家庭展望への志向性」では、大学生が未来

表 1 調査内容の構成

調査内容	項目内容	選択肢	
基本属性	学部, 学年	学部, 学年とも自由回答	
	年齢, 性別	年齢は自由回答, 性別は男性, 女性, その他から選択	
	家族形態 (実家)	父, 母, 兄, 姉, 弟, 妹, 祖父, 祖母, その他	
	両親の就業状況	共働き, 父のみ就業, 母のみ就業, 両親とも無職, その他	
	現在の居住形態	下宿, 実家, その他	
両親とのコミュニケーション	緊張したり, どぎまぎしないで, 自分の考えや考え方について母と話し合えることができる。 母はいつも私の話をよく聞いてくれる。 何か困りごとがあれば, 母親にそのことを話すだろう。 母は, 私が何かを聞けば, 正直に答えてくれる。		
	緊張したり, どぎまぎしないで, 自分の考えや考え方について父と話し合えることができる。 父はいつも私の話をよく聞いてくれる。 何か困りごとがあれば, 父親にそのことを話すだろう。 父は, 私が何かを聞けば, 正直に答えてくれる。		
親との関係	私は, 母のことを信用している。 私は, 母が考えていることを何となくわかっていると思う。 母は, 私がどう感じ, どう思っているか聞かなくてもわかっていると思う。 母は, 私のことを常に思ってくれていると思う。	(1) そう思う (2) まあそう思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない	
	私は, 父のことを信用している。 私は, 父が考えていることを何となくわかっていると思う。 父は, 私がどう感じ, どう思っているか聞かなくてもわかっていると思う。 父は, 私のことを常に思ってくれていると思う。		
これまでの生活経験	食事の準備 (の手伝い) をする。 自室や居間などの掃除をする。 洗濯をする (洗濯機, 手洗いなど)。 身の回りの整理整頓をする。 自分で使うお金の収支を把握する。 自分の健康状態に注意を払う。	(1) いつもしていた (2) 時々していた (3) あまりしなかった (4) ほとんどしなかった	
	近所の人と挨拶を交わす。 近所の人と話をする。 地域の催し物 (祭りなど) に参加する。 地域の社会活動 (清掃活動など) に参加する。		
家族観	円満志向 情緒的結合志向 共同活動志向 規律志向 自律志向	表 2 を参照。 (1) 非常に重要 (2) まあ重要 (3) あまり重要ではない (4) 重要ではない (5) 分からない	
	健康志向 愛他志向 自己成長志向 経済安定志向 持続可能性志向 審美志向 理論志向 文化継承志向	表 4 を参照。 (1) 非常に重要 (2) まあ重要 (3) あまり重要ではない (4) 重要ではない (5) 分からない	
	結婚に対する期待感	結婚願望の有無 (「ある」場合のみ, 以下 4 項目に回答) 私は, 将来の結婚生活に満足すると思う。 将来, 自分が結婚したときのことを想像することはよくある。 将来, 自分が結婚したときのことを想像するとワクワクする。 自分の結婚は幸福なものになるだろう。	(1) ある (2) ない (1) そう思う (2) まあそう思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 分からない
	子育てに対する期待感	子育て願望の有無 (「ある」場合のみ, 以下 4 項目に回答) 将来, 自分の子どもの世話をするのが楽しみである。 将来, 自分が親になることを想像することはよくある。 将来, 自分が親になる姿を想像するとワクワクする。 自分の子どもを抱くと幸せな気持ちになると思う。	(1) ある (2) ない (1) そう思う (2) まあそう思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 分からない
	未来の家庭展望	自分の将来の家庭は, 自分の力で切り開く自信がある。 将来, 家庭でどんな困難が生じて, うまくやっていく自信がある。 私の将来の家庭は, 明るいものになると思う。 私は自分の将来の家庭に希望を持っている。 私は将来の家庭のことはあまり考えていない。(逆) 私は将来の家庭のことをはっきり想像できない。(逆) 私は将来自分が家庭を持ったときのことを考えることがよくある。 私は将来の家庭のことを考えながら行動することがある。	(1) そう思う (2) まあそう思う (3) あまりそう思わない (4) そう思わない (5) 分からない

の家庭生活についてどの程度具体的に考えているかを、「そう思う」から「そう思わない」までの4つと「分からない」の計5つの選択肢の中から選んでもらう形式とした。なお、この質問項目においては、一人暮らしの生活の場合も家庭と捉えることを質問紙に明記したうえで回答を得た。

本研究では、大学生の未来の家庭展望を多角的かつ、より精緻に捉えるために、未来の家庭展望を以下の2つの階層から捉えることとした。まず、「未来の家庭展望の有無」を第一の階層として、大学生の未来の家庭展望が形成されているか否かを検討する。次に、「未来の家庭展望の肯定的・否定的捉え」を第二の階層として、未来の家庭展望が形成されている場合には、どのような展望が形成されているかを検討する。なお、分析にあたって、以下の2通りの方法で得点の集計と換算を行うこととした(図2)。

- ①第一の階層に関しては、未来の家庭展望について尋ねる質問項目に対して、「そう思う」及び「そう思わない」と回答した場合が2点、「まあそう思う」及び「あまりそう思わない」が1点、「わからない」が0点となるように得点を換算し(以下、この換算方法を「A方式」と示す)、合計得点が高いほど未来の家庭展望が形成されているものとみなす。また、未来の家庭展望の4下位尺度それぞれについて、「合計得点の平均値-1SD」点を基準点としたうえで、基準点を上回る下位尺度が3つ以上ある者を未来の家庭展望形成群、基準点未満の下位尺度が2つ以上ある者を家庭展望未形成群とする。
- ②第二の階層に関しては、家庭展望形成群を分析対象とし、質問項目に対して、「そう思う」と回答した場合が2点、「まあそう思う」が1点、「あまりそう思わない」

が-1点、「そう思わない」が-2点、「わからない」が0点となるように得点を換算した(以下、この換算方法を「B方式」と示す)。未来の家庭展望を尋ねる質問項目の合計得点が平均点以上だった者を肯定的展望群、平均点未満だった者を否定的展望群とする。

3. 結果及び考察

中国地方の4年制X大学に在籍する1年生と3年生の男女364名に質問紙を配布し、343部を回収した(回収率94.2%)。有効回答数は332部であった。回答者の内訳は1年男性が79名、1年女性が93名、3年男性が88名、3年女性が72名であった。なお、1年男性には2年男性が1名、3年女性には4年女性が4名含まれていたが、事前分析の結果、学年が異なる5名のデータは、それぞれ1、3年生の一般的傾向と差がなかったため、そのまま分析に用いることとした。

(1) 未来の家庭展望、家族観及び生活観の形成状況

1) 未来の家庭展望の形成状況

初めに、大学生の未来の家庭展望の実態を明らかにする。未来の家庭展望について尋ねる質問項目全16項目における合計得点の平均値をB方式で算出したところ、平均値は7.19点($SD=11.20$)であった。未来の家庭展望の4下位尺度における学年別、性別の平均値と α 係数を図3に示す。 α 係数より、未来の家庭展望の各下位尺度における内的整合性はある程度高いといえる。図3より、学年及び性別にかかわらず「子育てに対する期待感」の得点が最も高く、「結婚に対する期待感」及び「未来の家庭生活への希望」も相対的に高いことが示された。他方「未来の家庭生活への志向性」は全ての学年及び性別において負の値を示していた。学年(1・3年)と性別(男

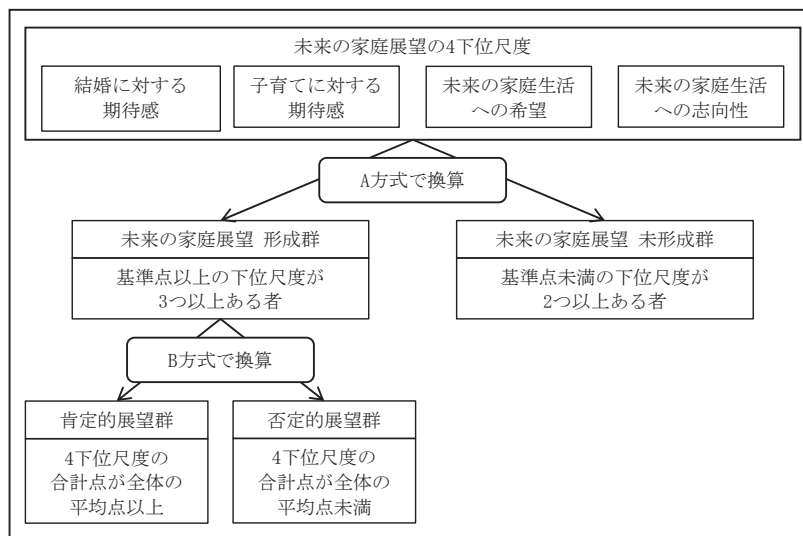


図2 尺度得点の数量化と対象者の分類方式

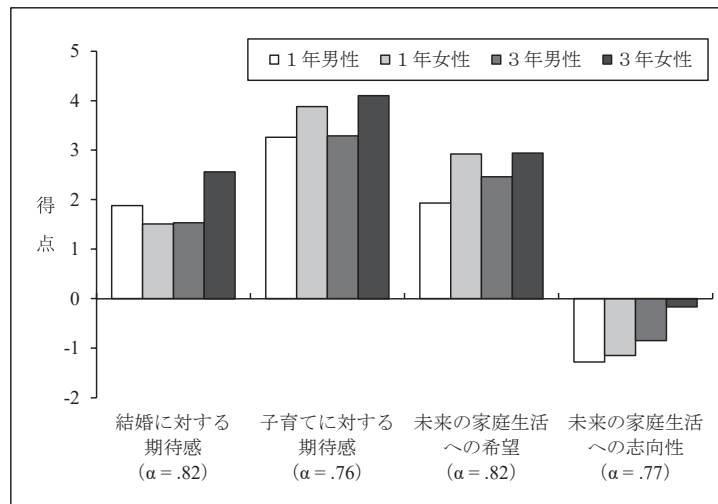


図3 学年・性別による未来の家庭展望得点 (各-8～8点)

性・女性)を独立変数, 未来の家庭展望の各下位尺度の得点を従属変数とした分散分析を行った結果, 全ての下位尺度において, 学年及び性別の主効果は有意ではなかった(「結婚に対する期待感」からそれぞれ, $F(3, 290) = 0.95, 0.87, 1.68, 1.16$, すべて $p > .10$). このことから, 大学生の未来の家庭展望における学年差及び性差は小さいといえる。

次に, 未来の家庭展望の4下位尺度それぞれについて, 「合計得点の平均値-1SD」点(以下, 基準点)をA方式で算出したところ, 「結婚に対する期待感」における基準点が2.32点, 「子育てに対する期待感」が3.53点, 「未来の家庭生活への希望」が2.31点, 「未来の家庭生活への志向性」が3.38点であった。この結果から, 基準点を上回る下位尺度が3つ以上あった256名を未来の家庭展望形成群, 基準点未満の下位尺度が2つ以上あった73名を家庭展望未形成群とした。

次に, 未来の家庭展望形成群を分析対象とし, 全16項目における合計得点の平均値をB方式で算出したところ, 平均値は9.01点($SD = 11.16$)であった。この結果に基づいて, 16項目の合計得点が平均点未満(-32点～9点)であった者を否定的展望群(121名), 平均点以上(10点～32点)であった者を肯定的展望群(135名)に分類した。学年・性別と未来の家庭展望の形成状況について χ^2 検定を行ったところ, 両者に有意な関連は認められなかった($\chi^2(3) = 10.78, p = .105$)。

以上の結果より, 大学生は, 未来の家族形成や家庭形成に対して肯定的なイメージを持っているものの, 自分が将来どのような家庭を形成しているかについて, 具体的に考えようとはしていないといえる。この結果は, 従来の研究や調査(五十嵐 1989; 国立社会保障・人口問題研究所 2017; 京都大学・電通育英会 2016)によって示された知見と同様であった。以上のように, 未来の家庭

展望の各下位尺度の得点において, 学年差及び性差が認められなかったことから, 以下の分析においては, 学年及び性別ごとの分析は行わず, 大学生をひとつの母集団とみなすこととした。

2) 家族観の形成状況

家族観について尋ねる質問項目に対して, 「とても重要」と回答した場合が2点, 「まあ重要」が1点, 「あまり重要ではない」が-1点, 「重要ではない」が-2点, 「わからない」が0点としたときの各項目の平均値及び α 係数を算出した(表2)。 α 係数の大きさより, 家族観の各下位尺度における内的整合性はある程度高いといえる。また, 各下位尺度の平均値の合計得点より, 大学生は家族円満や家族の情緒的な結び付きを特に重視していることが示された。一方, 家庭内に規律があることは, 他の志向性と比べ重視されていないことが明らかとなった。なお, 5項目中3項目で天井効果が確認された「円満志向」は, 以後, 分析の対象から除外する。

次に, 大学生が持っている家族観のタイプを分類するために, 階層的クラスター分析(Ward法, 平方ユークリッド距離)を行った。3から7クラスターへの分類を検討したところ, 解釈可能性から4クラスターが適当であると判断されたため, 家族観を4タイプに分類した。各タイプにおける家族観の各下位尺度の平均値を図4に示す。家族観の4タイプについて, 自立志向の得点が共同活動志向の得点を約2倍上回っているクラスター1(78人)を「自立重視型」, 「情緒的結合志向」の得点が相対的に高く, 「自立志向」の得点が最も低いクラスター2(88人)を「協働重視型」, 「情緒的結合志向」及び「自立志向」の得点が最も高く, 「規律志向」の得点が相対的に低いクラスター3(36人)を「自立協働両価型」, 「情緒的結合志向」, 「共同活動志向」, 「規律志向」の得点が最も高く, 「自立志向」の得点が相対的に高いクラスター4

表2 家族観の下位尺度における項目内容と平均点 (-10~10点)

項目内容	M	SD
円満志向 ($\alpha=.83$)	7.24	3.06
家族に笑顔が絶えないこと.	1.44	0.62
家族が明るい雰囲気を持っていること.	1.55	0.58
家族の間で会話が多いこと.	1.28	0.67
家族の仲が良いこと.	1.69	0.49
親子のふれあいが多くこと.	1.28	0.70
情緒的結合志向 ($\alpha=.79$)	5.30	4.11
家族内で必要な時に適切な助言・援助が得られること.	1.28	0.62
家族に何でも相談できること.	1.18	0.86
家族で悩んでいる人がいれば、お互いに励まし合うこと.	1.15	0.77
言葉に出さなくても思いが通じること.	0.49	1.14
家族に自分のことを理解してもらっていると感ずること.	1.20	0.72
共同活動志向 ($\alpha=.79$)	5.03	4.24
家族で外出すること.	0.74	0.89
ときには、家族そろって旅行すること.	0.78	0.97
家族の誕生日や記念日などをみんなで祝うこと.	1.09	0.89
家族と一緒に家事をしたり、手伝ったりすること.	1.10	0.74
家族みんなで食事をすること.	1.32	0.75
規律志向 ($\alpha=.69$)	3.62	5.02
家事を分担して行うこと.	0.94	0.94
家庭内でルールがあること.	0.64	1.13
親が子どもに甘いこと. (逆)	0.72	0.95
必要に応じて、家族で会議を開くこと.	0.13	1.11
子どもが親の手伝いをすること.	0.89	0.89
自立志向 ($\alpha=.70$)	4.97	4.35
家族がお互いに束縛し合わないこと.	1.11	0.83
家族がお互いに依存しすぎないこと.	1.05	0.84
自分の家族を他人と比較しないこと.	0.96	0.91
親が子どもの成績にこだわらないこと.	0.62	1.02
生活の上で親が子どもに注意すること. (逆)	1.23	0.75

注) α はクロンバックの信頼性係数

(126人) を「全志向重視型」と命名した。

3) 生活観の形成状況

生活観について尋ねる質問項目に対して、「とても重要」と回答した場合が2点、「まあ重要」が1点、「あまり重要ではない」が-1点、「重要ではない」が-2点、「わからない」が0点としたときの各項目の平均値及び α

係数を算出した(表3)。 α 係数の大きさより、生活観の各下位尺度における内的整合性はある程度高いといえる。また、各下位尺度の平均値の合計得点より、大学生は自身の健康や人間として成長することを特に重視していることが示された。一方、生活における審美や持続可能性への意識は、あまり重視していないことが示された。な

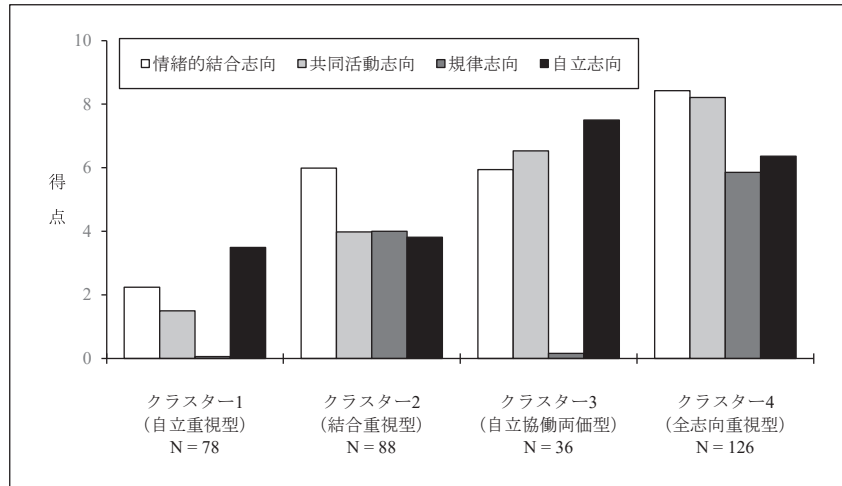


図4 家族観タイプに関するクラスター分析

お、4項目中3項目で天井効果が確認された「健康志向」は、以後、分析の対象から除外する。

次に、大学生が持っている生活観のタイプを分類するために、階層的クラスター分析（Ward法、平方ユークリッド距離）を行った。3から7クラスターへの分類を検討したところ、解釈可能性から5クラスターが適当であると判断されたため、生活観を5タイプに分類した。各タイプにおける生活観の各下位尺度の平均値を図5に示す。生活観の5タイプについて、他のクラスターに比べ、全ての志向の得点が0点に近いクラスター1（90人）を「無頓着型」、自己成長志向が最も高いクラスター2（129人）を「自己成長重視型」、愛他志向「持続可能性志向」及び「文化継承志向」が最も高いクラスター3（34人）を「関係性重視型」、他のタイプと比べ「自己成長志向」及び「経済安定志向」が比較的高く、「持続可能性志向」及び「文化継承志向」が突出して低いクラスター4（44人）を「自己重視型」、理論志向が最も高いクラスター5（31人）を「理論重視型」と命名した。

(2) 親との関係及びこれまでの生活経験が家族観及び生活観を媒介して未来の家庭展望の形成に及ぼす影響

「親との関係」及び「これまでの生活経験」がそれぞれ、「家族観形成」及び「生活観形成」を媒介し、「未来の家庭展望の形成」を規定する構造方程式モデルを図6に示す。モデルの評価基準としては、GFI（適合度指標）、AGFI（自由度調整済み適合度指標）及びRMSEA（平均二乗誤差平方根）を用いた。GFI及びAGFIは1に近いほどモデルの説明力が大きいと判断され、RMSEAは0.05以下であれば適合度が高く、0.1以上であれば適合度が低いと判断される。構築されたモデルの説明力及び適合度はGFI=.806、AGFI=.776、RMSEA=.083であり、説明力はやや大きく、適合度はやや低い解釈可能な範囲で

あると判断した。観測変数及び潜在変数の誤差項は省略した。なお、「家族観形成」及び「生活観形成」は、未来の家庭展望の各下位尺度得点の換算方式のうち、「A方式」に準ずる方法で得点の集計及び換算を行った。

「未来の家庭展望の形成」へのパス係数は「これまでの生活経験」からの0.34 ($p<.001$)、「家族観形成」からの0.61 ($p<.001$)及び「生活観形成」からの0.30 ($p=.007$)であった。また、「家族観形成」へのパス係数は、「異性の親とのコミュニケーション」及び「同性の親との心理的距離」から成る「親との関係」からの0.52 ($p<.001$)と、「これまでの生活経験」からの0.24 ($p=.036$)であった。一方、「生活観形成」を規定するパスはみられなかった。

以上の結果から、異性の親とのコミュニケーションが多く、同性の親との心理的距離が近いと感じているほど、また、これまでの生活管理や地域参加の経験が豊富であるほど家族観の形成が促されるといえる。さらに家族観及び生活観が形成されることによって、大学生の未来の家庭展望の形成が促進されるというプロセスが確認された。

(3) 家族観及び生活観タイプと未来の家庭展望の肯定的・否定的捉えとの関連

家族観4タイプと将来の家庭展望の形成状況（3群）について χ^2 検定を行ったところ、両者に有意な関連が認められた ($\chi^2(6) = 21.19, p=.002$)。どのセルが有意な関連に寄与したのかを明らかにするために、調整済残差を算出し残差分析を行ったところ（表4）、「全志向重視型」の家族観を持つ大学生が肯定的な展望を持っていることが示された。反対に、「自立重視型」では、未来の家庭展望が形成されていないことが示された。

生活観5タイプと未来の家庭展望の形成状況（3群）

表3 生活観の下位尺度における項目内容と平均点 (-8~8点)

項目内容	M	SD
健康志向 ($\alpha=.83$)	6.67	2.35
健康であること.	1.83	0.42
健康に注意すること.	1.60	0.64
病気や怪我をしないこと.	1.64	0.65
身体をいたわること.	1.59	0.64
愛他志向 ($\alpha=.92$)	3.93	3.88
他の人々の役に立つ人間になること.	1.19	0.91
社会のために貢献すること.	1.05	0.91
社会の幸福と平和のために尽くすこと.	0.76	1.08
他の人々のためになる仕事をする事.	0.93	0.98
自己成長志向 ($\alpha=.82$)	5.14	2.60
人間として成長すること.	1.25	0.70
自分の能力を高めること.	1.33	0.66
自分の心を豊かにすること.	1.36	0.57
新しいことを発見したり, 考えたりすること.	1.20	0.67
経済安定志向 ($\alpha=.83$)	4.16	3.36
安定した収入があること.	1.07	0.73
経済的に豊かな生活をする事.	1.09	0.86
高い収入を得ること.	0.64	1.06
金銭的な心配のないこと.	1.36	0.71
持続可能性志向 ($\alpha=.92$)	2.08	4.24
省エネルギーを心がけること.	0.50	1.06
物や素材を再利用すること.	0.46	1.04
自然環境への負荷を減らしていくこと.	0.60	1.02
自然環境に配慮した製品を利用すること.	0.52	1.12
審美志向 ($\alpha=.81$)	1.76	4.24
どうすれば美しさや綺麗さが際立つか考えること.	0.19	1.10
自分が綺麗だと思うものを集めたり, 飾ったりすること.	0.29	1.13
身の回りにあるものの形や色に興味をもつこと.	0.33	1.07
美しいものや景色を見ること.	0.95	0.94
理論志向 ($\alpha=.86$)	2.46	4.01
物事の法則性や規則性を見つけること.	-0.01	1.14
「これは何だろう」「なぜこうなるのだろうか」と疑問をもつこと.	0.97	0.94
事態を分析したり推理したりすること.	0.82	0.94
ものの仕組みや仕掛けがどうなっているのか, 興味をもつこと.	0.68	0.99
文化継承志向 ($\alpha=.93$)	2.23	4.43
郷土の伝統や文化を生活に生かしていくこと.	0.43	1.11
郷土の伝統や文化に触れること.	0.59	1.11
郷土の伝統や文化を伝えていくこと.	0.54	1.09
郷土の伝統や文化を大切にすること.	0.67	1.12

注) α はクロンバックの信頼性係数

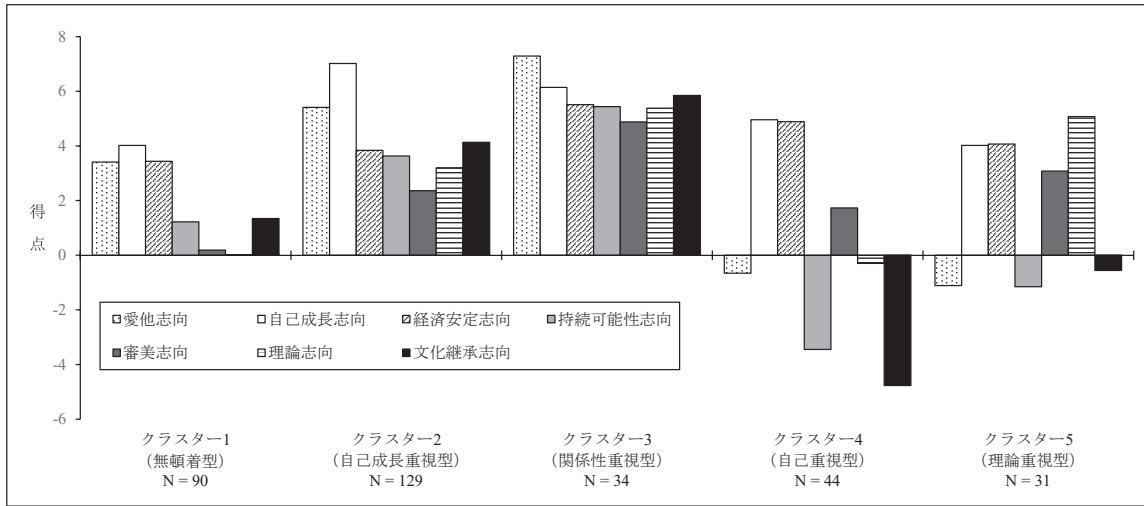


図5 生活観タイプに関するクラスター分析

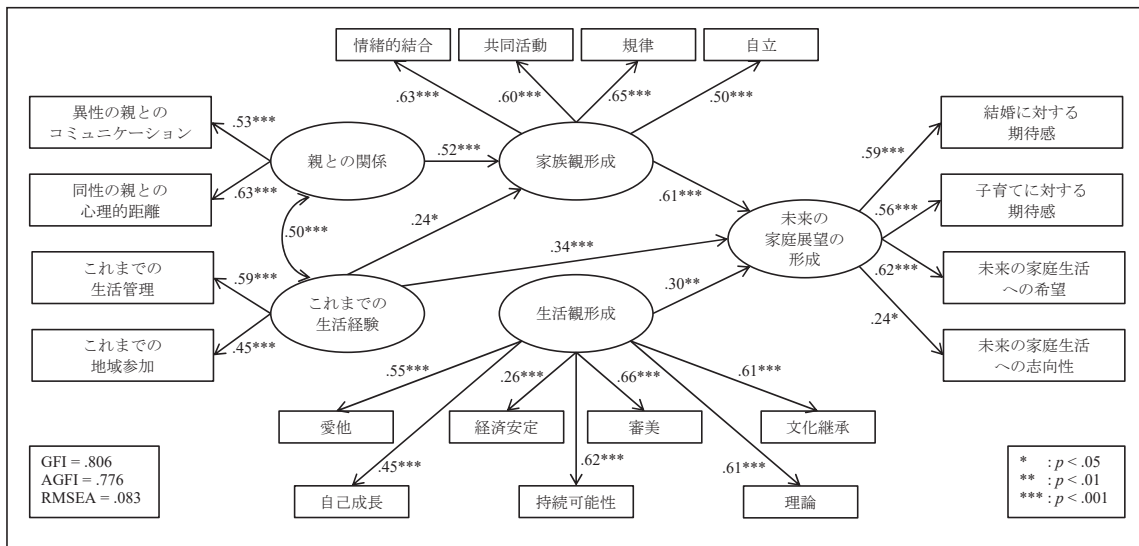


図6 構築された家庭展望モデル

表4 家族観タイプ×未来の家庭展望の残差分析結果¹⁾

家族観タイプ	展望形成群		展望未形成群
	肯定的展望群	否定的展望群	
自立重視型	-3.31 **	1.14	2.72 **
協働重視型	-1.28	1.04	0.35
自立協働両価型	0.11	-0.52	0.48
全志向重視型	3.83 ***	-1.55	-2.86 **

1) 数値は調整された標準化残差を示す。

** : $p < .01$, *** : $p < .001$

表5 生活観タイプ×未来の家庭展望の残差分析結果¹⁾

生活観タイプ	展望形成群		展望未形成群
	肯定的展望群	否定的展望群	
無頓着型	-1.90	-0.03	2.37 *
自己成長重視型	2.40 *	-0.97	-1.79
関係性重視型	2.92 **	-1.09	-2.29 *
自己重視型	-3.42 **	3.00 **	0.64
理論重視型	-0.36	-0.53	1.06

1) 数値は調整された標準化残差を示す。

* : $p < .05$, ** : $p < .01$

について χ^2 検定を行ったところ、両者に有意な関連が認められた ($\chi^2(8) = 29.34, p < .001$)。調整済残差を算出し残差分析を行ったところ (表5)、「自己成長重視型」及

び「関係性重視型」の生活観を持つ大学生は、肯定的な展望を持っていることが示された。一方、「自己重視型」

では、否定的な展望を持っていることが示された。また、「無頓着型」では、未来の家庭展望が形成されていないことが明らかとなった。

4. まとめ

本研究において、学年や性別にかかわらず、家族形成や家庭形成への肯定的なイメージを持つ大学生は多いものの、どのような家族や家庭を形成するかについて具体的に考えようとはしていないことが示された。また、未来の家庭展望の形成は、家族観及び生活観形成によって規定されることが示された。さらに、家族観や生活観のタイプによって、未来の家庭展望の捉え方に差異がみられることが明らかとなった。

(1) 大学生の未来の家庭展望の形成状況

本研究において、大学生は未来の家族形成や家庭形成に対する期待感及び希望を持っていることが明らかとなった。一方、家族形成や家庭形成への志向性は小さいことが示された。これは、従来の調査（国立社会保障・人口問題研究所 2017；京都大学・電通育英会 2016）によって示された大学生の傾向と同様であった。すなわち、家族形成や家庭形成についてのイメージをより明確に思い描くためには、青年期後期において家族や生活に関する独自の観念や基準を形成するとともに、それらの観念や基準を見直しながら、自身の未来の家庭生活を具体的かつ客観的に俯瞰することを通して、これまでの生活とこれからの生活を連続的なものとして捉えていく必要があるだろう。

また、大学生の家族観及び生活観タイプについて検討するために、階層的クラスター分析を行った結果、大学生の家族観は「自立重視型」、「協働重視型」、「自立協働両価型」及び「全志向重視型」の4タイプに、生活観は「無頓着型」、「自己成長重視型」、「関係性重視型」、「自己重視型」及び「理論重視型」の5タイプに分類された。大学生の家族観及び生活観の形成状況及びその実態を明らかにした点において、本研究の成果には理論的意義があると考えられる。

(2) 親との関係及びこれまでの生活経験が家族観、生活観形成を媒介し未来の家庭展望の形成に及ぼす影響

従来、親との関係やこれまでの生活経験と、大学生の未来の家庭展望との関連が示されてきた（堂野 2015；権田 2019；都筑 2013；佐藤他 2004）一方で、親との関係及びこれまでの生活経験がどのようなプロセスを経て、未来の家庭展望の形成に影響するのかというメカニズムには言及されてこなかった。本研究においては、親との関係及びこれまでの生活経験が大学生の未来の家庭展望

の形成に影響を与えるプロセスにおいて、家族観形成という要因が重要な役割を持つという独自の知見を得た。これに加え、豊かな生活とはどのようなものであるかという観念や基準である生活観の形成が、未来の家庭展望の形成を促すことも示唆された。

「親との関係」から「家族観形成」を媒介して「未来の家庭展望の形成」への影響がみられた点について、大学生が未来の家庭展望を思い描いていくには、これまでの自身の親との関係や親の姿を参考にしながら、自分なりの家族観を形成していくことの必要性が示唆された。岩月（2003）によれば、女性が結婚について考える際の基準となる「理想の男性像」の中には、自身の父親が反映されている。本研究の結果をふまえれば、青年男性とその母親との関係性についても同様の指摘ができるであろう。異性の親とのコミュニケーションを重ねることによって、大学生が自身の恋愛や結婚に対する考え、ひいては家族形成や家庭形成に対する観念や基準である家族観が形成されると考えられる。また、同性の親との心理的距離が近いほど、その親をモデリングする機会が多く、その親の姿と、家族や家庭を形成したときの自分の姿を重ね合わせることによって、大学生が自分なりの家族観を形成し、未来の家庭展望の形成に寄与するのではないかと考えられる。

「これまでの生活経験」から「家族観形成」を媒介して「未来の家庭展望の形成」への影響がみられた点について、生活管理や地域参加といった生活経験の蓄積によって家族観が形成されることによって、大学生が家族形成や家庭形成に対する明確な展望を持つことができるのではないかと考えられる。なお、これまでの生活経験が生活観ではなく家族観の形成を規定していることを鑑みれば、大学生における未来の家庭展望の形成は、家族共同での生活経験の蓄積が大きく影響していると考えられる。

「生活観形成」が「未来の家庭展望の形成」に影響を及ぼすことが明らかとなった一方で、どのような要因が生活観の形成に寄与し、未来の家庭展望の形成を促すのかについては、本研究で厳密に結論づけることはできなかった。例えば長峯・外山（2019）は、個人の過去に対する感傷的な思慕、すなわち過去に対するポジティブな感情とネガティブな感情が入り交じった感情を持つ青年は、未来に対するポジティブな態度をとることを示している。この結果をふまえれば、未来の家庭展望の形成には、生活管理や地域参加などの生活経験の多寡にかかわらず、むしろ現在の自分がこれまでの生活経験をどのように捉えているかが「生活観形成」に影響している可能性が考えられる。いずれにせよ、今後は生活観形成を促す要因を特定できるような研究デザインの構築が必要であろう。

(3) 家族観及び生活観タイプと未来の家庭展望の肯定的・否定的捉えの関連

大学生の家族観及び生活観タイプと未来の家庭展望の肯定的・否定的捉えの関連について、家族観及び生活観タイプの違いによって、未来の家庭展望の肯定的・否定的捉えに差がみられることが明らかとなった。とりわけ、「全志向重視型」の家族観を持つ大学生、及び「自己成長重視型」、「関係性重視型」の生活観を持つ大学生において、未来の家庭展望を肯定的に捉えている人数の割合が高いという独自の知見を得ることができた。一方、本研究では、大学生の家族観及び生活観タイプと未来の家庭展望の肯定的・否定的捉えの関連を示すにとどまっておらず、家族観及び生活観タイプの形成過程や、各タイプと未来の家庭展望の構築及び肯定的・否定的捉えとの因果関係を明らかにすることはできなかった。この点について、今後さらなる検討が望まれる。

(4) 今後の課題

今後の課題は以下の4つである。

第1に、家族観及び生活観形成を媒介し、未来の家庭展望の形成に影響を及ぼす要因として、「親との関係」及び「これまでの生活経験」以外の要因について検討していない点である。今後は、家族観及び生活観形成を媒介し、未来の家庭展望に影響を及ぼす他の要因、例えば青年の両親の関係性等に着目し検討するとともに、それらの要因が未来の家庭展望の形成に及ぼす影響の程度を明らかにする必要がある。

第2に、家族観及び生活観の下位尺度についてさらなる検討が必要である点である。本来、生活者一人一人の家族観や生活観は多様であり、それらを尺度で捉えることは困難である。今後は、大学生を含め、様々な世代の家族観及び生活観の実態を捉え、その構成要素や多様性について明らかにしていくとともに、家族観や生活観を捉える最適な測定方法について、さらなる検討が必要と考える。

第3に、使用した尺度の妥当性についてである。各尺度において、クロンバックの信頼性係数を算出し、内容的妥当性は確認しているものの、サンプルサイズの観点から内容的妥当性以外は検討されていない。今後は、本研究で使用した尺度と外在基準等との関連を明らかにすることによって、各尺度の妥当性を様々な側面から検討していく必要がある。

第4に、本研究の調査対象が大学生にのみ限定されている点である。青年期全般にわたる家庭展望の実態を明らかにするためには、高校生や社会人を対象とした調査や、高校生から大学生、大学生から社会人への移行期における家庭展望形成の様相を明らかにするための調査を

行い、青年期における家庭展望の実態を多面的に捉える必要がある。

付 記

本研究の一部は、日本家庭科教育学会2020年度大会において発表した。

文 献

- 堂野恵子 (2015). 女子大学生の自立と将来適応感に母親及び父親との心理的距離が与える効果. 安田女子大学紀要. No. 43, 57-65.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle* (Psychological issues Vol. 1). New York: International Universities Press. (西平直・中島由恵訳 (2011). アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房).
- 榎田あずさ (2019). 親から受けた愛情の認識と女子短大生の結婚・出産に対する意識との関連. 山陽論叢. No. 25, 217-230.
- Greene, A. L. (1986). Future-time perspective in adolescence: The present of things future revisited. *Journal of Youth and Adolescence*. Vol. 15, 99-113.
- 五十嵐敦 (1989). “青年期の家族展望—家族についての時間的展望—思春期・青年期問題と家族”. 家族心理学年報. No. 7, 197-216.
- 今川真治 (2017). 恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと大学生の結婚観との関連. 広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域). No. 66, 213-222.
- 石井僚 (2015). 時間的連続性尺度の作成. 青年心理学研究. Vol. 27, 39-47.
- 井梅由美子 (2019). 大学生の結婚観、および子育て観について—自身の被養育体験、父母との関係性、対象関係に着目して—. 東京未来大学研究紀要. No. 13, 11-21.
- 岩月謙司 (2003). 娘は男親のどこをみているか. 講談社.
- 梶山曜子, 鈴木明子 (2018). 母親からみた父親の生活態度と児童の生活技能習得との関連. 家政誌. Vol. 69, 757-767.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017). 現代日本の結婚と出産—第15回出生動向基本調査 (独身者調査ならびに夫婦調査) 報告書一. 国立社会保障・人口問題研究所, 13-14.
- 小西史子, 黒川衣代 (2000). 親子のコミュニケーションが中学生の「心の健康度」に及ぼす影響. 家政誌. Vol. 51, 273-286.
- 杭瀬智子, 三澤咲美 (2003). 日本における家族特性評価尺度の作成. 臨床死生学年報. No. 8, 30-49.
- 京都大学, 電通育英会 (2016). 大学生のキャリア意識調査.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social conflict: selected papers on group dynamics*. New York: Harper. (猪股佐登留訳

- (1974). 社会科学における場の理論 [増補版]. 誠信書房).
- 三川俊樹, 井上知子, 芳田茂樹 (1993). 新価値観尺度の開発. 追手門学院大学文学部紀要. No. 28, 35-48.
- 村田直子 (2009). 関係性から見た時間的連続性についての考察: 心理療法における時間と他者. 大阪大学教育学年報. No. 14, 51-61.
- 長峯聖人, 外山美樹 (2019). ノスタルジアが時間的態度に与える影響—本来性を媒介要因として—. 教心研. Vol. 67, 190-202.
- 奥田雄一郎, 阿部廣二, 三井里恵 (2016). 大学生の地域愛着と時間的展望. 共愛学園前橋国際大学論集. No. 16, 157-164.
- 大石美佳, 松永しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態. 家政誌. Vol. 59, 461-469.
- リクルート住宅総研 (2015). 家族観, 住まい観に関する世代別価値観調査. リクルート住宅総研, 14-18.
- 酒井恵子, 山口陽弘, 久野雅樹 (1998). 価値志向性尺度における一次元的階層性の検討—項目反応理論の適用—. 教心研. Vol. 46, 153-162.
- 櫻井登世子, 本多潤子 (2004). 「なりたい親」におよぼす思春期の親子関係の影響. 人間福祉研究. No. 7, 65-76.
- 佐藤文子, 志村結美, 深谷純子 (2004). 時間的展望における自己認識と生活実践. 千葉大学教育学部研究紀要. No. 52, 103-108.
- 白井利明 (1997). 時間的展望に生涯発達心理学. 勁草書房.
- 田中敏, 上村桃香 (2017). 青年期全体における親子間の心理的距離の変化と青年の自我発達との関連性. 信州心理臨床紀要. No. 16, 59-71.
- 都筑学 (2009). 中学校から高校への学校移行と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討—. ナカニシヤ出版.
- 都筑学 (2013). 小・中学生時代の活動経験と大学生・社会人における時間的展望との関連. 教育学論集. No. 55, 103-121.
- Winnicott, D. W. (1965). *The Maturation Processes and the Facilitating Environment*. London. The Hogarth Press Ltd. (牛島定信訳 (1977). 情緒発達の精神分析理論. 岩崎学術出版社).
- 山内星子, 伊藤大幸 (2008). 両親の夫婦関係が青年の結婚観に及ぼす影響: 青年自身の恋愛関係を媒介変数として. 発達心理学研究. Vol. 19, 294-304.
- 吉城秀治, 辰巳浩, 堤香代子, 白井颯太 (2018). 児童期における地元地域との関わりとソーシャル・キャピタル形成の関係. 日本都市計画学会都市計画論文集. Vol. 53, 333-340.
- 湯尾啓子, 湯尾慎一 (2008). 基本的生活習慣・生活技術と将来の生活設計の関連性. 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集. No. 51, 6.

親との関係及びこれまでの生活経験が 大学生の未来の家庭展望に及ぼす影響

—家族観, 生活観を媒介して—

渡辺 朗生^{1*}, 今川 真治¹

本研究では, 大学生の未来の家庭展望の形成状況を明らかにすること, 親との関係及びこれまでの生活経験が家族観及び生活観形成を媒介して, 大学生の未来の家庭展望の形成に及ぼす影響を明らかにすること, そして, 大学生の家族観及び生活観タイプと未来の家庭展望の肯定的・否定的捉えとの関連を明らかにすることを目的とした. 本研究によって得られた知見は, 以下のとおりである.

(1) 大学生は, 未来の家庭, 家族形成に対する期待感や希望を持っている一方で, 未来の家庭生活の具象化レベルは低い傾向にある. (2) 異性の親とのコミュニケーションが多く, 同性の親との心理的距離が近いと感じているほど, また, これまでの生活管理や地域参加の経験が豊富であるほど家族観の形成が促されることが示された. また, 家族観及び生活観が形成されることによって, 大学生の未来の家庭展望の形成が促進されるというプロセスが確認された. (3) 大学生の家族観は「放任型」, 「協働重視型」, 「自立重視型」及び「全志向重視型」の4タイプに, 生活観は「無頓着型」, 「自己成長重視型」, 「関係性重視型」, 「自己重視型」及び「理論重視型」の5タイプに分類された. (4) 「全志向重視型」の家族観を持つ大学生と, 「自己成長重視型」及び「関係性重視型」の生活観を持つ大学生において, 未来の家庭展望を肯定的に捉えている人数の割合が高かった.